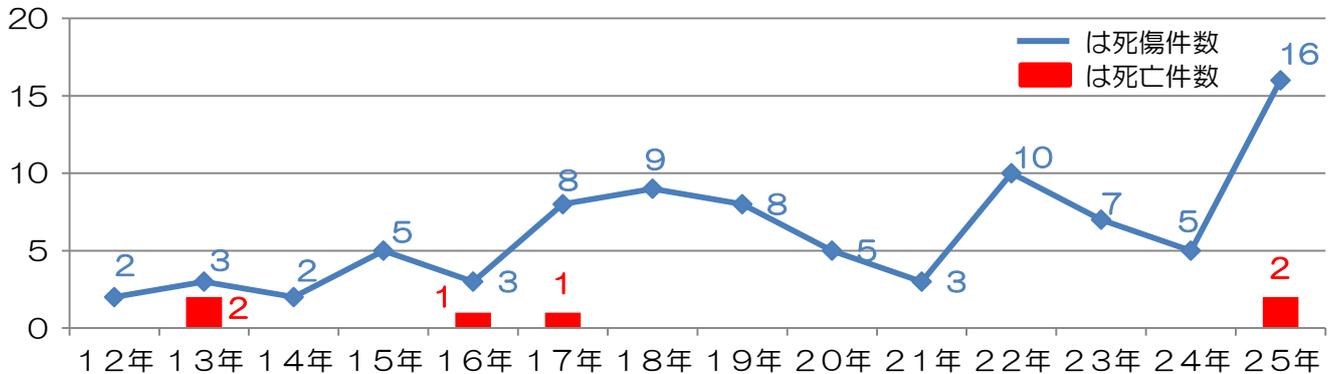


STOP! ザ 熱中症

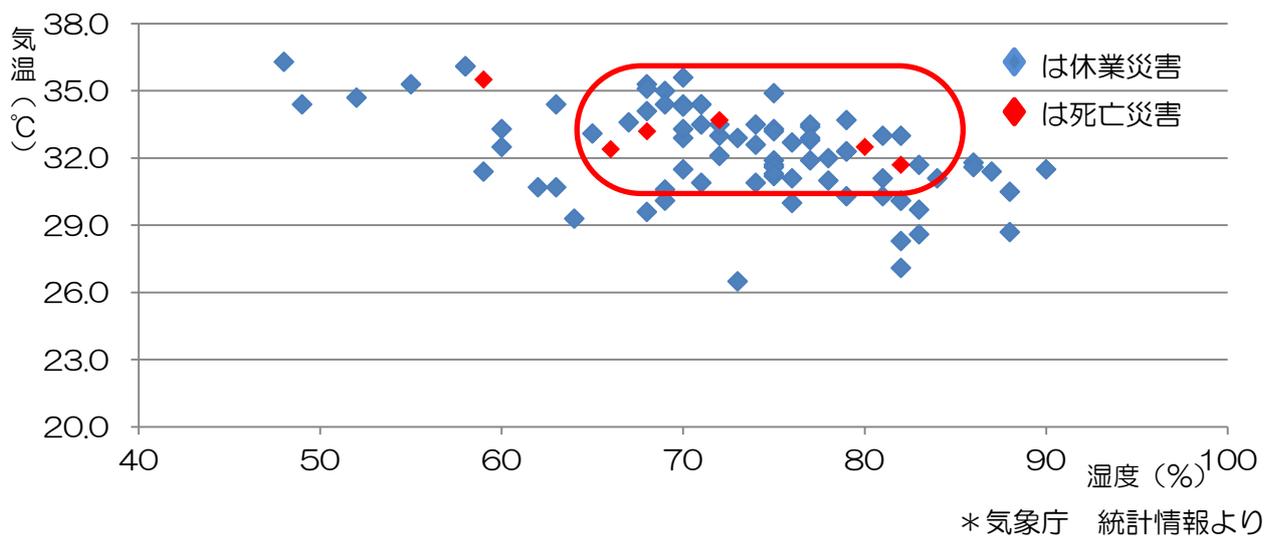


昨年は全国的な猛暑が続き、長崎県下でも7、8月は日中の最高気温が35度を超える猛暑日が観測される中、熱中症（疑い含む）による死亡災害が2件発生しました。例年、6月～9月にかけて発生しているので、このパンフレットを参考に熱中症の対策を講じましょう。

① 熱中症による災害発生状況



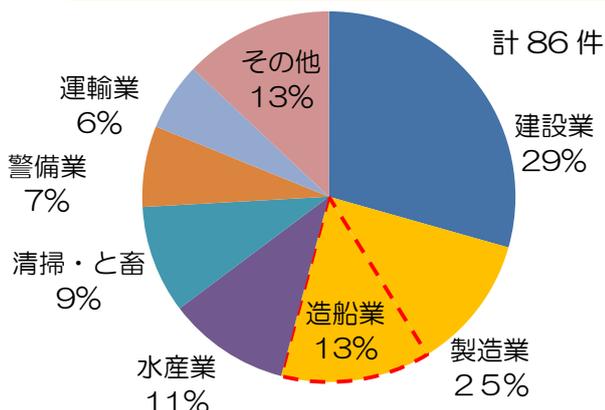
② 熱中症発生日における最高気温及び湿度



熱中症発症当日の最高気温及び湿度（災害発生場所の最寄りの測候所統計）を集計したところ、最高気温30℃以上で湿度が65%を超える区域に集中しています。

平成26年5月23日に福岡管区気象台が発表した九州北部地方の3ヶ月（6～8月）予報では、気温が平年並又は高い確率が**70%（6、7月）**、**80%（8月）**となっており、警戒する必要があります。

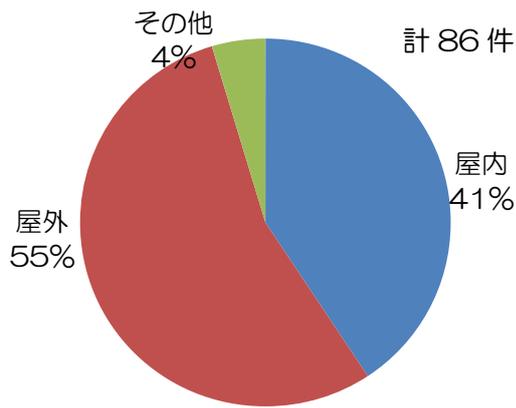
③ 業種別・労働災害発生状況（熱中症）



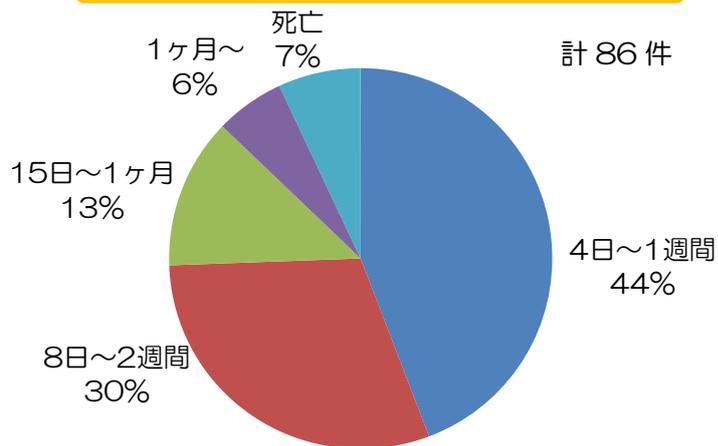
平成12年～25年に発生した長崎県内の熱中症による死傷者数86件を業種別に分類すると、建設業が最も多く全体の約3割を占めています。

製造業では、造船業が11件（全産業の13%）と多く発生していますが、その他にも水産業、清掃・と畜（産廃業）、警備業など屋外作業の多い業種が目立っています。

〈④屋内・屋外の別（熱中症）〉



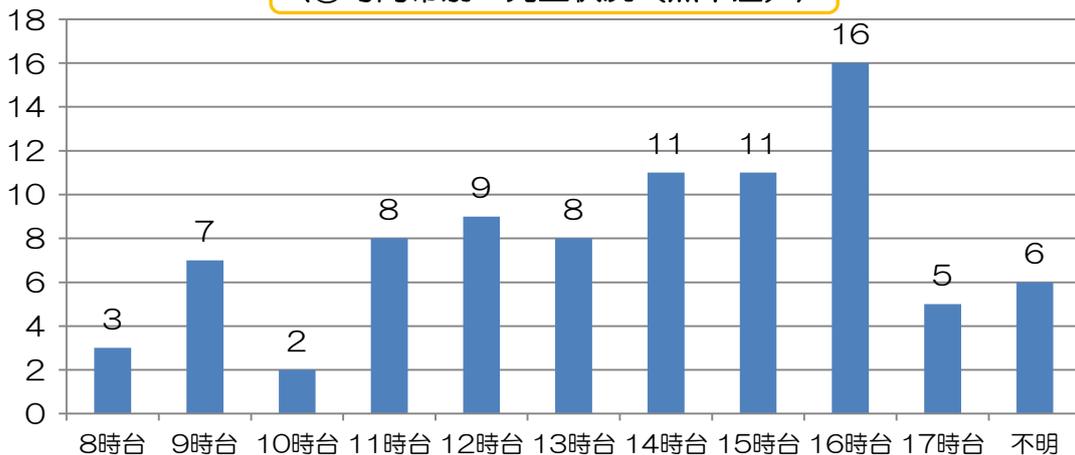
〈⑤休業期間別・労働災害発生状況（熱中症）〉



屋内・屋外の別をみると、輻射熱（てりかえし）の影響から屋外で熱中症にかかる割合は高いものの、室内においても通風が不十分な作業場所や溶接現場、造船所における船内作業などでも発生しており、屋内・外を問わず発生する可能性があります。

休業期間別でみると、約半数近くが「1週間以下」です。しかし、死亡災害の割合も高く全体の7%を占めており、2極化の特性があります。

〈⑥時間帯別・発生状況（熱中症）〉



発生時間帯でみると、最高気温に達する**午後2時から4時の間**で、多発しています。

県内の近年における熱中症（疑い含む）死亡災害発生状況

番号	発生時期	業種	年代	発生状況
1	25.8	建設業	40代	被災者は建設工事現場で作業していたところ、体調不良を訴え、病院に搬送されたものの、熱中症の疑いにより死亡したものの。
2	25.7	農業	50代	午前中から畑で作業を行っていたところ、午後4時過ぎに気分が悪くなり病院へ搬送されたが、熱中症により翌日死亡したものの。
3	17.9	建設業	50代	建設工事現場で石積み作業中、午後4時頃、被災者が体調不良を訴えたため、しばらく休憩させた後、被災者を自宅へ送ろうとしたものの、車内で意識が消失し、熱中症により死亡したものの。
4	16.7	建設業	40代	建物解体作業中の午後4時過ぎに被災者の様子がおかしかったため、休憩させ、午後5時過ぎに被災者を自宅へ送ろうとしたが、意識を消失し、熱中症により死亡したものの。

（注）当該災害統計は平成12年～25年に発生した熱中症による労働者死傷病報告書（休業4日以上）を元に作成しております。

(熱中症対策)

○作業環境管理

1 WBGT (暑さ指数) の値の低減に努めましょう

環境省の「熱中症予防情報」で全国約850箇所においてWBGTの値が公開されており、携帯通信サービスもされているので、積極的に活用しましょう。

(<http://www.wbgt.env.go.jp/>)



WBGT 値が25℃～熱中症の可能性がります。必要に応じて下記対策を講じましょう。
(休憩場所の整備)

項目	取組事例
冷房を備えた休憩場所や日陰等の涼しい休憩場所を設けましょう	冷房  日よけ 
氷、つめたいおしぼり、シャワー等の設備を設けましょう	製氷機  シャワー 
水分及び塩分の補給を行えるようにしましょう	冷水機  あめ 

○作業管理

(1) 作業時間の短縮

作業の休止時間や休憩時間を確保すること。高温多湿作業場所の連続時間を短縮すること。

(2) 熱への順化

高温・多湿の作業場所で作業させる場合は、計画的に熱への順化期間を設けること。

(3) 水分及び塩分の摂取

自覚症状以上に脱水症状になることも多いことから、定期的な水分及び塩分の摂取を励行すること。(スポーツドリンク又は経口補水液等を20～30分ごとにカップ1～2杯程度は望ましいこと。)

(4) 服装

透湿性及び通気性の良い服装を着用させること。(直射日光では通気性ある帽子も)

(5) 作業中の巡視

労働者の定期的な水分等の補給や健康状態を確認すること。



○健康管理

(1)「雇入時の健康診断」、「定期健康診断」において、熱中症のリスクが高まる下記疾病などと密接に関係する「既往歴の調査」、「血圧の測定」、「血糖検査」などに異常所見がないか確認し、異常のあるものについては医師等から意見を聴くこと。

●糖尿病

糖尿病の患者は常に喉が渇き水分を多く欲しがり、尿量が多くなる場合があります。そのため、自覚症状がなく十分な水分補給がないまま、脱水症状になるケースがあります。



●高血圧症、心臓病や腎臓病

高血圧症や心疾患で治療している場合、体内に水分がたまり心臓の負担を軽減するため、強制的に排泄する利尿剤を内服しているケースがあり、ナトリウムも同時に排出し、熱中症のリスクが高まる危険性があります。



●その他（皮膚病、精神・神経疾患）

広範囲の皮膚疾患があると、発汗がうまくいかないケースがある。また、精神疾患があると、自律神経のコントロールがうまくいかず、体温調整に支障をきたす場合があります。

(2) 熱中症は「睡眠不足」、「体調不良」、「前日の飲酒」、「朝食の未摂取」など日常の健康管理不足がリスクを高める要因となります。

特に今年の夏はサッカーワールドカップが開催され、深夜の視聴により生活のリズムが乱れるなど健康管理に注意する必要があります。

これはレッド
カード■



二日酔い



夜更かし



体調管理
が大事



規則正しい生活



○労働衛生教育

高温・多湿作業場所で作業する労働者に対し、あらかじめ下記事項にかかる労働衛生教育を実施しましょう。

- (1) 熱中症の症状
- (2) 熱中症の予防方法
- (3) 緊急時の救急措置（緊急時の病院の連絡先の把握、緊急連絡網の作成など）



(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001dwae-att/2r9852000001dwhn.pdf>)

- (4) 熱中症の事例など

《まとめ》

夏は暑く、WBGT値の高い数値が続くことが予想されますが、各種手法を試みることで熱中症のリスクを下げることは可能です。

しかし、管理者と作業者ともに熱中症に対する共通認識を持ち、積極的に対策に取り組まないと効果は得られません。今年の暑い夏を「熱中症災害0」で乗り切りましょう！！

